
rabbit & tiger

白兎 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r a b b i t & t i g e r

【Nコード】

N 2 8 8 9 W

【作者名】

白兔 成

【あらすじ】

年の離れた幼馴染の兎と虎。

可愛がってきた虎はすっかり反抗的で兎はさびしさを感じるが…。

半年以上前にupした『兎と虎』の数年後のお話。

新たな始まり（前書き）

これは 白兎 成 の作品『兎と虎』 a f t e r s t o r y となっております。

よろしければ、そちらからお読みください。
兎の頭の中が分かりやすくなると思います。

新たな始まり

規則正しいリズムが階段を上ってくる。

その音に着替える手を止めた。

何故自分の部屋に向かう足音と分かるかって？

私の部屋がある二階には物置部屋（ごみ溜め場とも言う）と自分の部屋しかない。

そして、ウチにはこんなに礼儀正しい足音の持ち主はいない。

心当たりはただ一人。

私に用があつて来る、ということだ。

今日もまた、ノックなしで扉は開かれた。

「虎、」

「：兎」

小学校高学年ぐらいから、言動がグッと大人びた弟分の虎。

何がそうかえたのかは知らないが。

「ノックしてから開けなさいよ」

つつい、言ってしまう。

「姉気面するな」

こう言うことは分かっているのだが。

「それとこれとは別でしょ。例えば姉弟でもこういうのはいがみ合いになるし、虎が言う姉じゃないって気持ちがあるなら余計そうするべきだよ」

寂しいな、と感じるのはいけないことだろうか。

ずっと一緒に居た弟が急に知らない男の子になってしまったかのようで。

「暇そうに見えて、大学生も結構大変なんだよ」
疲れて帰って来る日もあるのだ。

それがまた、油を注ぐことになる。

「高校生、大学生ってそんなに年上がえらいのかよ」

事あるごとに出してくる年の差。

どうも、『年上』と言うのがネックだというのは分かるのだが。

そのせいで無理をしているのは長い付き合いならではの感で見えている。

大事な子が無理する姿を見たいと言うようなひねくれ方はしているつもりもないし、全くもって見たくない。

できるなら、元気に笑っている姿が見たいというのが普通だろう。

虎が『ずっと一緒に居る』と言っていたあの時の真っ直ぐな眼、彼の素はあれだった。

「…年上がえらいとか、姉気面するなとか言うけどさ。そういう、年の差を気にして差を広げてるのは虎だって分かってる？」

あの時からどこで変わってしまったんだろうか。

今の彼は何かに焦っている、それをなんとかしようと無理な飾りを付けているようにしか思えない。

素直な気持ちをそのまま言葉にして、後悔した。

ギラギラと鋭く光る眼、悔しい気持ちを露わにした歪んだ口、それらは手負いの獣とよく似ている。

「虎は、虎なんだよ」

言いたいのは、無理をするな、ということだ。

傷付けたいんじゃない。

「――ら――く、よ」

食いしばるその口から、ぽつり、何かが聞こえた。

「虎？何て言ったの？」

苦しんでいるそんな姿を見て、昔のように抱きしめて、慰めたいと思ったがそれこそ年下扱いだと拒絶されるに違いない。

寸でのところで声をかけるだけに留める。

「それなら、…そんな無理をしてる俺も俺だって見てくれよ!!」
悲痛な叫びに二の句が継げず、口を開いたり閉じたりを繰り返す。
次は眼を見開くことになった。

小さな頃、ずっと一緒に居る、と抱き着いてきたあの頃の状態に
時間だけ巻き戻る。

「もう、小さな頃の俺じゃないんだ」

とうに背は越されていて、体はすっぽりと包まれた状態。

それ以上に頭に響く心音が全身の緊張を伝えている。

苦しそうなかすれた声もはつきり聞こえていた。

自然と頭を撫でるための手が伸びる…けれど、長さに頬に添え
るまでが限界だ。

初めは頬に添えられた手を包むように触れていた虎の手がキツイ
くらいにアタシの手を締めつける。

「俺はお前を姉だと思えない」

……お前のことが好きなんだ、一人の男として

新たな始まり（後書き）

r a b b i t & t i g e r、いかがでしたか？

近日中に次話を上げたいと思いますので覗きに来て下さると嬉しいです。

お読みになって頂きありがとうございました。

距離感（前書き）

『兎と虎』を読んで下さった方が予想以上に多く驚きました。そして、このページを覗きに来て下さった貴方に感謝です。二人の追いかけて楽しむで頂けたら嬉しいです。

距離感

昔より小さくなった兎は俺の腕の中にすっぽりと収まっている。
今まで感じてきた焦りの代りに急くような気持ちは収まりそうにないが。

捕まえていないとどこかへ行ってしまうに違いないのだから当然だ。

「虎、」

いつだってそう。

——それは、おねえちゃんの延長線でしょ？と言って。
すぐに高い壁を残して行ってしまうのだ。

「ずっと側に居る」

だから、壁を作る暇も与えない。

身動ぎした彼女に確かな記憶があることが分かる。

あの頃の彼女は、それが幼い執着だと思っていたに違いない。

「姉弟じゃずっと側にはいられない」

既にあの頃からそんなことは知っていた。

一つ一つの言葉にうろたえる小動物を眼に映しながら、誰とも知らない男にぶつける。

『コイツの中にいるのはお前だけじゃない』

眼を泳がす兎の手を包んだその手はそのままに反対の手を兎の頬に添え、視線を外せないようにする。

「もう、逃がさない」

覚悟しとけ、と言に残し、閉められたドアを見つめる。

「何が、起こったの」

災害の被害と同じ感じた。

どうして、こうも突然な上に重なるのか。

帰宅途中に今の出来事、ひとつでも頭を抱えていたのに。

思い出すだけで溜息が出る。

「考えて欲しい」

そう言われて振り返れば手を取られた。

真っ直ぐな黒い瞳が薄れ、薄茶色に背が少し低くなって弟と思っていた虎に変わる。

そのあとに、決まって。

『捕まえた』

そこで、眼が覚める。

「また、うつらうつらしちゃって」

肩を掴んだ友人は笑う。

「もう何回目よ？」

居眠りしている間に講義は終わってしまったらしい。

「そんなの、数えてないわよ」

ここ数日この調子だ。

二日に一度は押し掛けてきていた虎の足音はぱたりと途絶えた。

とても近いと感じていた小さな頃、違う人のように変わって、遠

退いても、それでも弟の様で。

それなら、今の虎は、どうなる？

夢で見る程遠退いたということだろうか。

「変わってしまった、貴方は誰…？」

受け入れがたい現実。

男っ気の無い兎が男と二人並んで歩いているのを見かけた。
いつも繋いでいた手は俺だった。

それが、崩れかけている。

壁を作られる度、遠退く。

測れない距離を駆けて、捕まえなくちゃ、ならない。

誘われるがまま、その手が誰かの手を取る前に。

距離感（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。

平安時代には、夢の中に好きな人が出てくるのは「相手も自分のことを想ってくれている」という証しだと考えられていたそうです。

両想いかどうかは知りませんが（笑）

そして、兎の例えは的を射ています。

虎の告白は二次災害なのです……。

バランス1（前書き）

今回も覗きに来て下さった方、ありがとうございます。

バランス1

彼女のモットーは一見狭く深く、のように見える。

しばらく見ていて、気が付いた。

来るものは拒まない。

そして、去る者は追わない。

彼女だけに限らず、入学当初は不安からか期待からかは分からないが、グループ行動が増える。

仲良くなったり、疎遠になったり、それは当然のように行われる。

そんな中、じっと動かない彼女はあまり人の視線を集めることは無い。

かえってそれが理由で自分の眼に留まったのだが。

もうひとつ、彼女の友人は女だけで数も多くは無い。

自分と違う、それが気になった。

彼女は初めての会話を覚えているだろうか。

頭を悩ませ続けている、問題。

「アタシにどうしろと？」

夢に魘されて起きた回数を数える気にもならない。

あれ以来顔を合わせていない、虎はその分だと言わんばかりに夢で現れる。

「甲崎くんから虎に変わって…」

そう、返事を返す相手は二人。

甲崎 コウサキ ハジメ 肇を認識したのは通学中の電車の中だっただろうか。

具合が悪いのか青白い顔で扉近くに立っていたのだが。

……別段、どうとも思わなかった。

ひとつ前の駅で大勢人が乗り込んだので動く迷惑だし。

かといって、気付いた存在を忘れる程ではなかったが。

一時間も揺られる電車、決して乗り心地がいいものではない。

カーブに差し掛かったところで、先程まで揺られていた長身が見えなくなった。

眼を凝らせば僅かに避けるような周囲の動き。

どうやら、しゃがみこんだらしい。

「大丈夫ですか？」

薄情な、と思いながらも避けられてできた間を潜り抜けて、辿り着いた青年は初めて見た時よりも気分が悪そうで、青白さを通り過ぎて土気色になっていた。

「座った方が今よりマシになると思いますよ」

動かない青年の傍にしゃがみこむ。

「運よく、酔止めも水もありますし」

経験上、気休めにはなる。

手を引いて、自分の鞆のところへ向かう。

好奇の視線が集まろうと構わない。ただ、道を開けてくれるなら。

二度目に見た時、最初は眼を疑った。

彼は派手目な大勢の友人に囲まれて快活に笑っていた、が。

「お腹でも痛いのかな」

右手が横腹を絶えず擦っていた。

たったそれだけ。

いつの間にか話すようになって、何故か一緒に帰るようになっていて、ついこの間は遅くなったからと彼にとっては二つ先の私の家

の近くまで送って貰った。

その途中で、突然手を握られたと思えば告白。

色々と間をすっ飛ばした気がするのは私だけだろうか。

バランス1（後書き）

ふと、考えたら問題は二つ。

可哀想にセカンドインパクトに消えかけていたファーストインパクト。

彼女にはきっかけが足りない様子。

彼には確固たる理由がある様子。

R&Tの話を期待した方、ごめんなさい。

次回も覗きに来て下さるとうれしいです。

バランス2

僕は同学年より、ひとつ年上。

つまり、一浪した後、現在大学に通っている。

元来、気が弱い自分が周りに溶け込むには空気を読むことが不可欠だ。

入学試験の時なんかは最悪だった。

自分ひとり私服で、周りの視線が、声が突き刺さる感覚は二度と味わいたくない。

ひとりあぶれないためなら、人格までも作ってしまおうというのが僕の考えだ。

来る者は拒まない、それだけでなく自分から引き入れる。

去る者はその前に手を打つ。

広く、広くと手を伸ばす関係は薄くなっていく。

あの日もそうだった。

「今日も元気そうには見えないわね」

僕たちの隣を通り過ぎた彼女の眼は僕を見ていた。

確かに二重生活を送り続けて数カ月。

胃の痛みに耐えることが多くなった。

周りの誰も僕に気が付かなかったにもかかわらず、彼女は気付いた。

それからだ、何もかも違う彼女を眼で追うようになったのは。

話しかけるきっかけは、良くも悪くも年下の少年。

その前日の帰り、自分が降りる駅で擦れ違った少年は、真っ直ぐ

に彼女の元へと滑りこむ。

嬉しそうな顔を前面に押し出していたのにもかかわらず、ドアをくぐると不機嫌そうな顔をする。

親しげに話し始める中、苛立ちが募る。

そこで気付いた。

彼と自分は同じだ、と。

彼と彼女を引き裂きたい、と。

彼女の嬉しそうな横顔が遠退いて行くのは当然なのに、まるで、その少年と自分との差が開いていくようで。

数日前、伝えた。

「僕を見て欲しい」

表面だけ見るアイツらよりも、キミと一緒に居て、笑いたい。

「おはよう」

会いたくなかった。

いつもなら、私が話しかけろうと言うのに。

「やっど、捕まえた」

強張る表情にこれでいいのだと笑う。

もう、離されはしない。

彼女が傷付こうとも、誰かの手を取られるくらいなら。

「逃げようとしても、どこまでも追いかけるよ?」

開いた扉から人が波のように押し寄せる。

流されながらも目は逸らさせない。

兎の背中が反対の扉に辿り付く。

押しつぶされないように、俺が壁になってるのなんか、気付いてないんだろう。

お前の中の俺はまだ、
守られているだけの子供なのか……？

バランス2（後書き）

前回は兎の中の二人、今回は肇と虎&虎と兎のバランス。

肇と虎が似ているようで反対なこと、分かって貰えたらいいなあ。

次回も懲りずによりしくお願いします。

試合は終わらない(前書き)

5話目まで覗きに来て下さった貴方、ありがとうございます。
少しでも楽しく読んで頂けるよう精進します！
最後までよろしくお願いします。

試合は終わらない

頭に浮かぶのは前日の友人の言葉。

「あんたさ、悩みでもアンじゃないの？」

私にとって数少ない友人が尋ねる。

「もう一週間経つよ？アンタが何も言っ
てこないから聞かなか
ったけど」

強かにぶつけた額を押さえながら、振り向く。

「まるで、アタシに悩みがないような言い方だよ、ソレは」

失礼なことを言うな、と睨むと、

「そういう意味じゃないわよ」

つん、と眉間を突く。

人差し指は垂直に下りて鼻の前で止まる。

「良くも悪くもマイペースで（一部の前で以外は）ポーカーフェイスなアンタにしちゃ、珍しいって言ってるの」

結局、貶しているのではないかと思いい口を開こうとしたその時、

「よっぽど大事なことなんだなって、思ったのよ」

眉を歪めた彼女はアタシの顎を掴んで、

「何かあったら、話しなさいよ？アンタの背中、蹴り飛ばしてあげるから」

「虎、あのさ…アタシは」

——ぎこちないけど口動くちうどうしようとしたのに。

「急がなくていいよ、俺は長期戦狙ってんだから」

今すぐじゃ勝ち目無さそーだし、と先手を打たれた。
ちらりと外を伺う様子を見て、次が虎の降りる駅だと知る。

「どーせ、アイツにも同じ返事で片すつもりだったんだろ」
アイツ、に心当たりがあり過ぎてというよりも何故知っているの
かが気になる。

「ほら、あの席空くぞ：兎は酔いやすいんだから座つとけよ」
そういうと、手を引いて座席の近くに移動していく。
掻き分けている訳ではないのに、自分が押しつぶされることは無
い。

「じゃ、俺行くわ」

開いた扉から外へ颯爽と出て行った。

何というか、ここのところ敗北続きな気がする。

本気で蹴り飛ばしてもらう必要があるそうだ。

試合は終わらない（後書き）

兎は『虎と兎』の時のような結構冷めた子だと思います。

愛情は理解できるんですけど、恋愛になるとからつきです。振り回されます。

惚れた点では虎が、振り回されている点で兎が負けなんでしょうね。

缶蹴り（前書き）

続けて読んで下さる方々に感謝です。

缶蹴り

「アンタ、何やってんの」

「――受け身の練習中だから、放つという頂戴」
頭抱えて悶えてんのだよ、察してください。

「へえ、それってあれでしょ？」

明らか面白がっている友人は携帯を覗きこむ。

「誰も、見てとは言っていない」

「見るな、とも言っていないよね」

簡単にいえば、突然震えだした携帯が原因だった。

「お誘いなんて、隅に置けないわねえ」

隣のベンチに腰掛け、こちらを覗きこむ。

「何？コイツ、片思いしてるんだ？」

彼女がメールだけで判断できるのは予想の範囲内だ。

「えらく、自分に自信がないのね」

文章からでも読み取れるように、やはり学内の彼は演技なのだろう。

自分が言えたことではないが。

「で、兎ちゃんはなんて返事する気？」

何でこんなことに、と叫び出したい気持ちでいっぱいである。
見事に蹴り飛ばされた……缶蹴りかのように、思いっきり。

拾いに行くアタシは鬼で、待つ彼は……何だろう。

「来てくれてありがとう」

人に囲まれたあの人と違う顔をするこの人は確かに甲崎本人なの

だろう。

「……いや、御礼を言われることでは」
嬉しそうに話す彼には申し訳ないのだが、了解メールを送ったのは友人なのである。

「どういう経緯があつたとしても、キミと一緒に話ができることが嬉しいんだよ」

見透かされているのかとも思える発言に顔を上げた。

「やっと、眼を合わせてくれた」

ふわりと笑う穏やかな人、笑顔を見たのは初めてかもしれない。いつも、青い顔でいるイメージのその人が微笑んだ。

「甲崎くん、笑った方がいいよ」

こんなにも、温かく笑うことができるなら、

「無理をしなくても、そのままの甲崎くん、あの中で笑っていいられるよ」

周りを賑わす、ムードメーカーではないかもしれないけど。

思わず吐いた言葉に誰よりも自分に驚く。

「……余計なこと、

虚をつかれたかのように固まった様子に訂正を入れようとする。

「余計なことなんかじゃない。ただ、そんなこと初めて言われたな、って」

今度は照れが混じるような表情で笑う。

わりと、表情豊かな人らしい。

「僕さ、君といると新しい自分に出会える気がするんだよ」

「気弱なだけの僕が優しくなれる気がするんだ」

えらく、自信がないのね——友人の声が蘇る。

この人は、そうなんだ。

「違うわ」

「え？」

「貴方は確かに気弱かもしれない。たとえば、そうであったとしても優しい。それは、アタシがそうさせてるんじゃないの。それが、貴方自身だから、できるの」

だから、もっと自信を持つべきだよ。

「楽に、無理せずって意外に難しいものだから、迷うことも多いと思う」

私だって、いつも自分の思うままに出来る訳でもない。

「でも、そんな風に笑えることが増えたら、いいね」

彼女が、僕の前で笑う。

あまり、笑わない彼女が、笑った。

初めて、僕に向けて笑ってくれた。

「そうだね」

たったそれだけ、でもふわりと凝り固まったものが解れる感覚。そんな温かさに背中を押されて、言わなくてはならないと息を吸う。

その為に、今日は告白後話すことも戸惑っていたにもかかわらず踏み出したのだ。

「あの、さ」

「アンタ、降りる駅ここじゃねえの？」

缶蹴り（後書き）

はい、残念なことに邪魔が入りました。

貴方の想像している方で間違いないと思います。

不憫な、と思いつつ、ここで切らせて頂きます。

まだまだ拙い文章ですが……次回も、ぜひ覗いてくださいね。

first contact (前書き)

本日も覗きに来てくれた方、ありがとうございます。

恋愛経験皆無の白兔が始めた為に、何じゃこれは！と思う部分もあるかと思えます。

その時はビシバシ指摘しちゃってください。

皆さんに楽しんでもらえるよう、精進いたしますので、今回もよろしく願います。

first contact

「そうだね、教えてくれてありがとう」

ソイツは笑う。

知っている、と感じさせる表情。

俺がコイツを知っているように、コイツも俺に気付いていたらしい。

話しかけて来たことに驚きがない。思ったより、厄介かもしれない。

眼が俺たちの間を右往左往する様子から兎は気付いていなかったらしいが。

「もう少し話がしたかったんだけど、時間がないんじゃないかな」

自身の時計を見て苦笑いをしながらも、兎の隣から立ち上がる。

「今じゃまだ駄目だって、分かってるから。返事は急がないで」
名残惜しそうにその場を離れないソイツは俺と同じ。

「僕は結構気は長いし、いくらでも待つよ」

それが言いたかったんだ、と穏やかに笑うと足を踏み出す。

『今日はありがとう』、と扉をくぐる時に振り返った時の笑顔は俺のことは無視したのだろう。

それ程までに柔らかい。

ま、それ程のことはしたような気もする。

電車は10分後出発した。

「虎、知ってた？」

「……何が？」

「さっきの駅は15分停車だったってこと」

一瞬どう答えるべきか考える。

「俺の時計がずれてたみたいだ」

そんなこともないが。

ただの、悪戯心だ。そんなに責められるほどのことじゃない、と口を噤む。

そんな俺の内心も知らず、ふうん、と納得する兎。

顔を伺えば、見返されて「何？」と言葉が返ってくる。

「いや、何でもない」

彼女は静かに笑う。

時計がずれていたなんて、嘘だ。

瞬時に察しておきながら何も言わなかったのは何故か、……そんなの決まっているではないか。

「それが、虎の妥協点？」

「…そんなじゃねえよ」

喧嘩を吹っ掛けなかっただけマシ、なのである。

最近の若者は存外にキレやすい。

私には理解しがたいが。

大人に見えるようになっても感情が分かりやすい。

確かに、苛々しているように見えた。

「ま、いいんだけど」

それより聞きたいことがある。

「甲崎くんと知り合い？」

接触するのは先程の駅に違いない。

甲崎くんにも動揺は無い。

……ならば、お互いの存在を知っている、というのがアタシの見解である。

因みに二人に互いのことを話したことは無い。

勝手にお互いで知り合ったということ。確率的にありえないが。

「顔を知ってるだけだろ、互いに」

ぶっきらぼうなそれに眉を跳ね上げる。

先程のやり取りを全体的に思いだす。

虎が乗車してから、甲崎くんは答えを先延ばしする言葉を話した。どう考えても告白の先延ばしの言葉で。

それを、虎がどう解釈するのか。

物の貸し借り、という雰囲気と感じる奴か、コイツ。

その時の虎の様子は、どうだったっけ？

一気に駆ける思考にぐらぐらする。

「兎？」

はっと見上げれば、心配そうな顔をした虎。

「どうした？」

随分、考え込んでいたようだ。

「酔ったんなら、おぶろうか？」

「落っこすんじゃない？」

ふふっと笑って、立ち上がる。

表情に、私がよく知る片鱗がのぞいて、思わず笑う。

「あん頃は……！」

まだ二人が四六時中一緒だった時に戻ることはいないんだな、とようやく受け入れ始めた。

あの頃と言われるくらいに、昔話と語れる年月が経ったことは分かっている。

不器用なことはお互い様だ。

無理な背伸びを隠せない、虎とその感情を理解できないアタシ。

どっちが譲ることになるのかな、と不機嫌な虎に引かれる手を見て思った。

first contact (後書き)

兎、虎の言葉をとりあえず、拒否することはありませんでした。
虎、一人前に嫉妬&肇に危機感を感じてます。
肇、虎に宣戦布告しました。

と言う感じで、新たなスタートかな、とも思います。
次回もぜひぜひ、覗きに来て下さいね。

閑話休題（前書き）

何故に閑話休題？早すぎやしないか？と思われた方、いらっしゃるかも知れませんね。

すいません、書きたいという気持ちに負けました。

本編を読んでいなくても読めますが、本編を読まれた方はこの回も読むと、今までの話に繋がるものがあるかもしれません。

閑話休題

虎はウチのお隣に住んでいる5歳下の男の子だ。

これだけ年が離れていると、虎が覚えていないことも覚えていたりする。

最初に話した言葉が、パパママでなく、うーちゃ（兎ちゃんと言いたかった模様）だったりとか。

虎ママはこれはシスコン（あの時は意味が分からなかった）間違いなし、と笑っていた。（虎パパはへこんでいたけど）

一人で歩き回れるようになったら、一日中べったりだったりとか。それが可愛くて、抱きしめてるあたしも十分ブラコンなんだけさ。

まるで、本当の姉弟のように育って、お出かけもいつも一緒。

それは私が中学生になっても変わらなくて。

あの日は初めて二人だけの遠出だったかな。

隣町の図書館に行く予定で、電車に乗ったんだよね。

虎と二人でお出かけが出来ることに嬉しくて、前日はなかなか寝れなかった。

後で知ったんだけど、睡眠不足は乗り物酔いのももらしい。

「兎？ 具合悪い？」

「そ、そんなことないよ…」

強がって見せるものの、心配で曇った顔が晴れることは無い。

自己嫌悪に陥りながら笑ってもちらちらとコッチを見る様子におねえちゃん、形無しである。

ぎゅ、と手が握られる。

「大丈夫。兎には僕がいるんだから！」
隣から、一生懸命な声が聞こえて。

「……そうだね」

情けないのと、頼もしいのとごちゃ混ぜになりながら笑う。

ちゃんと笑えてなかったらしいけど。

目的の駅まで、虎が一生懸命になって楽しい話をして気を紛らわせようとしたのは薄ら覚えている。

駅に着いたまでは良かった。

フラフラしているアタシを虎がおぶると言い出したのだ。

以前、虎のお兄ちゃんの龍兄が私をおぶっていたのを覚えていたらしい。

「兄ちゃんにできるなら僕にもできるもん！」

それは流石に無理なことは気分が優れずとも分かる。

「大丈夫だよアタシ重いし！」

虎が潰れる。流石に私が小柄だとしても7歳に12歳は背負えまい。

「兄ちゃんは羽のように軽いつて言ってたもん！」

中学生のあの時でさえこう思った。

——龍兄、虎に変なこと教えないでよ！！と。そんな臭いセリフを龍兄がどこで覚えて来たのかも甚だ疑問だ。

変な駄々をこねだした虎に困って、出した妥協策は背負われるフリをすること。

「じゃ、お願いしようかな」

手を虎の首に回して、後ろで足を動かして歩く、という感じだ。これで、うまく行っていたのだ。

虎が躓くまでは。

どうやら、前のめりになり過ぎていたのが原因らしい。

このままじゃ、虎が下敷きになる……！！

と思った時、予想とは逆にふわりと体が浮く。

「兄ちゃんのばかぁー！出てこないって約束だったのにー！！」
どうやら、元の計画は虎と龍兄と私で行く予定だったのを虎が二人（虎と私）で行けると言い張って聞かなかったらしい。

変なところで頑固な虎に私達の両親はお手上げ。

そこで、龍兄が遠くから見るといふ条件で決行されたらしい。

私たちは、はじめてのおつ●いかと言われても仕方ない状況で撮影までされていたというのだ。

虎の家族と私の家族、（常識的に）大丈夫なのか？と思ったのはよく覚えている。

「何見てんの」

不機嫌そうな虎は二人掛けのソファの隣に腰を下ろす。

「懐かしいでしょ」

「悪夢だ、何度見ても」

俯いて顔は見えないが、耳は真っ赤。

「確かに。でも、アタシにとっては」

——大切な宝物だったりするんだけど

閑話休題（後書き）

虎の兄、龍が出てきました。

行き当たりばったりで今まで存在しなかった龍が出来ました。

本編に出て来るかは微妙ですが。本編に『乗り物酔い』のエピソードがあったので閑話休題として挟ませていただきました。

瞳

「で？デートはどうなった訳」

「ただ一緒に電車に乗っただけでしょ、そんなんじゃない」
根掘り葉掘りするのには、勝手に返信をした友人。

「えー、勿体ぶんじゃないでよー」

放っといってくれ、これはアタシの問題だ。

「だってさあ、アンタの色恋沙汰なんて聞いたことないし？」

ニタニタと笑う彼女は胡散臭い。

「でさ、どうよ？エセムードメーカーは」

甲崎くんが相手と言うのはメールの登録名で知ったのだろう。

情報があったといっても彼が大きいグループの中心ということは私も知ってはいたが、名前は知らなかった。

彼女は割と色々と情報収集しているのかもしれない。

「エセって、辛辣な……でも、まあイメージとしては違うよね」
ベンチの背に全体重を預けて空を見上げる。

「なんというか、」

目の端に映り込んだ緑に笑みが浮かぶ。

「木みたいな人だね」

「……また、微妙な表現を」

穏やかで、長い時を生きていて、周りの状況によって姿を変えることができる。

「――アンタの観察眼には恐れ入るわね」

わりと芯が強いところもあるし、と呟く彼女にどこか違和感を感じたのだが。

「やばっ！そーいや、アンタに頼みたいことがあるんだった」

「志保、何でそんな計画性がない訳？」

もうちょっと、しっかりしていたと思うんだけど。

「だから、悪かったって」

課題提出は明日なのに、一文字も埋まって無いってどういうことよ。

お互い名前を呼ぶ時は茶化す時か、お説教タイムだ。

「ね、時間もないし」

必死で宥めようとする言葉なのか、本当に時間が足りないせいかなど並べることには仕方ないと論文を開始する。

「悪かったわね」

心底申し訳なさそうな彼女に、何を今更、と笑う。

「いいわよ、もう」

結局、真夜中までかかったソレを丁寧に鞆に入れる彼女。

流石にこんな時間に年頃の女の子を返す訳にはいかないと、両親は即決でお泊りを決行した。

「もう一人娘ができたみたいだって二人とも喜んでたし」

いつもより気合が入った朝食を食べて、玄関を潜る。

「お邪魔しました」

中にいる両親に向かって挨拶をする志保を待っていると、隣の玄関の扉も開いたのが見えた。

「兎：つと、兎の友達？」

後ろから出て来た女を兎は軽く紹介した。

兎の斜め後にいるから兎には見えていないんだが、見られている気がする。

気の強そうな猫目でじろじろと見られていると落ち着かない。

何か気に障る事でもしたか？とでも思うくらいにキツイ視線だ。

「隣に住んでいる、羽柴 虎です。どうも」

今まででこの日の通学時間程、居たたまれない日は無かった。

「あのさ、聞いてもいい？」

虎がそそくさと電車を降りて行ったドアを見ていたアタシに彼女は遠慮がちに聞く。

「何？」

「虎くんとアンタ、付き合ってるの？」

「付き合ってなんかいいわよ」

思わず、間髪いれずに返す。

「ふうん？見てた感じアンタに気があるみたいだったからさ」
彼女を敵に回すと恐ろしい気がする。まるで、エスパーだ。

「そ、そうかな？何で？」

「あの子の自己紹介の仕方よ」

何かおかしい所があったようには思わないのだが。

剣呑な目にぎよっとする。

——虎、アンタ何してくれたのよ

帰途

今日の志保はとても扱いづらい。

無駄に苛々して、刺々しくて、なのに『何故?』という言葉をはぐらかそうとする。

「虎が気に障るようなことしたんなら謝らせるから、理由を教えてください。」

側にいるアタシの気持ちにもなってくれ。

私という選択肢が一番に上がったが、ソレは違うと言い、具合が悪いかと聞けばソレも違う。

選択肢を絞っていきながら、どうやら虎関連であるらしいと結論付けた。

いつものベンチでお揃いの弁当を広げてどれほどの時間が経っただろうか。

「アタシに言い辛いなら電話貸すよ?」

それでも縦には頷かない。

「まあ、いいわ。昼食べてもらわないとその弁当箱持って帰れないから食べちゃってよね」

ウチ特有の甘い卵焼きを口へ運んだ。

結局、原因は分からぬまま大学内で別れを告げる。

「おばさんにお弁当の御礼言っといてくれる?」

「分かった、伝えとく」

志保はもう一つ多く科目を取っている為に登下校は別だ。

どうしてこう、悩みは重なるのだろう、と溜息をつく。

ひとつずつ片付けなくてはと思う気持ちに反して次々押し寄せる問題を消化する時間がない。

上の空のアタシが危うく乗り過すことになりかけたところに、声がかかる。

「何やってんだ、兎」

「あれ、龍兄？ 久しぶりだね」

腕を引いて、下車させてくれたのは虎の実兄であり、私の兄のような存在だった。

「確かに久しぶりだな」

確か、隣の県の会社に就職してたんじゃない？

「ちょっと、実家に挨拶しに、な」

龍兄の隣には女の人が立っている。

「三原 陽子って言います」

「陽子さん、ホントに龍兄でいいの？」

「こら、何を言うか！」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられる。

言葉事態は丁寧ではないが、いつだって優しい龍兄。

「聞いてた通りだわ」

「だろう？」

くすくす笑う陽子さんの顔を見上げると、

「弟の虎君とセットで良く話を聞いているのよ」

柔らかに笑う彼女は名前のように陽だまりを感じさせる。

「失礼なこと言ってませんでした？」

主に幼少期の笑い話を聞かせていたらしくそっぽを向いて知らんぷりする龍兄に、それを優しく笑う陽子さん。

とても幸せそうで、ぴったりのカップルだと思う。

この人なら、きっと幸せにしてくれるだろう。

大切な人だから、絶対幸せになってね、なんて思いながら二人を

見ていた。

あつという間に家に帰りついて、二人に別れを告げる。

「結婚式には絶対呼んでよね？」

一瞬、龍兄の動きが止まり、陽子さんの腰を引き寄せて中に入っていた。

振り返りもせずに入っていく時、確かに聞こえた、

『楽しみにしとけよ』

の言葉を心に刻みつけ、幸福感を感じながら、我が家へ入っていた。

帰途（後書き）

前回虎の名字が出ました。が、今回は兎の名字が出ました。彼女は片瀬 兎です。

閑話休題2（前書き）

とうとう10話を超えました。

読み続けてくださっている方、ありがとうございます。

これは本編の陽子さん視点となっています。

閑話休題にはなっていますが、本編に入っても問題ないと思うので読んで頂けたら嬉しいです。

閑話休題2

「そんなに不安なら、会ってみるか？」

龍さんにプロポーズされたのは半年前。

結婚式の準備も着々と進む中、義弟となる虎君とセットで話に上がる『兎ちゃん』。

私はその子が羨ましかったのかもしれない。

その子の名前が上がる度、不安になるのだ。

龍さんに似合いの人は私ではないのではないかと。

顔に出したことは無いつもりだったのに、いつ知れてしまったのか。

恥ずかしい思いで一杯で、断ろうとしたのに。

「陽子の可愛い嫉妬見せてもらっちゃったからな」

なんて、からかいながら、

「陽子によそ見されるのもアレだし、妹分の兎にも俺の嫁さんをお披露目しとこうか」

抱きしめてくれる。

今更その腕を手放すことができないのだけど、マリッジブルーかしら。

広い背中に手を回しながら、頭の中はやっぱり、不安だった。

龍さんのご両親にはすでに顔合わせを終えていたけれど、弟の虎君には初めて会うことになっている。

一応、婚約者がいるということは事前に話して貰っているから一

から話す必要は無いのだけど。

「こんなおばさんだって知ったら、どう思うかしら」

実は、私は龍さんの4つ上の28歳。

これも不安を煽るひとつの原因。

今更、乙女を気取るつもりは無いけれど、気になるものは気になる。

女はいつまでも綺麗だって思われたものじゃないかしら。

そんなことを言ったら、また、笑われた。

「そんなの、虎はどうこう言うようなことしないさ」

太陽みたいな笑顔に惹かれたのだけど、今はそんな笑顔も眩しすぎる。

移動は新幹線と電車。

隣り合う県だから車でも良かったのだけれど、一泊して次の日はお互いに仕事だからって話し合いをした。

出発時間が結構遅かったから、車だったら帰宅ラッシュに巻き込まれていたかもしれない。

午後5時、電車の中を席を探して歩いている時だった。

「あれが兎だよ」

二人分空いた席を見つけ、声をかけようとした時だった。

視線を追いかけると、肩を過ぎたあたりまでのストレートの黒髪の少女がいた。

外の景色でも見ているのか、遠くを見ている姿はどこか儂くて。

「降りた後にでも声かけて一緒に帰るか」

あまり、話した内容を覚えてはいない。

「次、降りるぞ？」

覗きこまれて、慌てて返事をする。

「あら？」

先程から様子が変わらない彼女を見て、疑問に思う。

大丈夫かしら、あの子。

遠くを見ているというよりは上の空で何も見えていないような気がする。

「龍さん、兎ちゃんに声かけて降りた方がいいかもしれないわ」
身支度をして、人の多い車両を龍さんが掻き分けていく。

下車する様子の無い彼女の手を引き、降り立つ。
名前を呼ばれてようやく意識が浮上したらしく、驚いているようだった。

「ちよっと、実家に挨拶しに、な」

さらに、眼を見開いて、数回瞬きをする。

やっぱり、私なんかよりという感情がこみ上げる。

「おめでとう！！」

そんな薄暗い感情が吹き飛ぶ程の笑顔で祝福された。

きゅ、と力がこもった手を優しく包まれる感触にほっとする。

「さっきは、おめでとう何て言っちゃったけど。陽子さん、ホントに龍兄何かでいいの？」

既に、疑惑が晴れた今となっては疑うことも無くて、笑うことができた。

じゃれあう二人は、本当の兄妹のようで。

「聞いていた通りだわ」

「だろう？」

繋がれた手にきゅ、と力が込められて、私も思いを込めて、握り返す。

ああ幸せってこういうものなんじゃないかなんて思った。

「結婚式には絶対呼んでよね？」

光り輝く表情が本当に祝福してくれていることを確信させる。

隣で、照れたような笑みを浮かべる人が愛しくて、身を寄せる。
きっと、彼女にはちゃんと伝わったと思う。

「お帰り」

意外にも出迎えてくれたのは弟さんの虎君だった。

「はじめまして。龍の弟の虎です」

お話は両親に聞いています、と丁寧を始められて慌てて背筋を伸ばす。

「で、ホントにウチの馬鹿兄貴でいいんですか？」

さつき、兎ちゃんに聞かれたこととほとんど変わらない質問に思わず噴き出す。

「虎にしても兎にしても、何でそんなこと言うんだろな……」

ぼそっと呟くその声を聞いて、笑いが止まらない。落ち着かせてから、はつきり答える。

「私は、龍さんがいいんです」

今更、この人を手放すことは無理というものだ。

あとで、二人きりになった時に聞いたことだが。

虎君は兎ちゃんのことが好きで、よく龍さんに一方的に張り合っていたらしい。

『俺が兎のことを好きだなんて言った日には一生口きいてくれな
いと思うぞ』

なんて、冗談半分に言っていた。

年の差はほぼ、5歳。

大人びた言葉の中に年相応の顔がのぞくのは兎ちゃんとの年の差を気にしてのことかもしれない。

私に似た、未来の義弟の為に何かしてあげたい、なんてちょっとお節介かしら。

虎（前書き）

今回も足を運んでくださりありがとうございます。

虎

「3ヶ月後だってさ」

出会い頭に何かと思えば、

「二人の結婚式」

そこまで言われてようやく龍兄と陽子さんの結婚式のことだと分かった。

「アンタ、何で教えてくれなかった訳？」

3ヶ月後と言うともっと前に結婚自体は決まっていた筈だ。少しばかり、蚊帳の外で面白くない。

「昨日知ったのにどうやって教えるって言うんだよ」

話を聞けば昨日、両親から龍兄の婚約者が来るから、としか聞いていなかったらしい。

「3ヶ月後って聞いたのは昨日の夜だよ」

どうやら、私達を驚かせてやろうという魂胆だったらしい。

目論見通り、驚かされた訳だが。

「それならそれで時期が微妙じゃない？」

もうちょっと近づいてから言いそうなものだ。

「あー、色々あるらしくってな」

理由を知っていきそうな反応だが、あまり聞かれないらしい。

「そっか」

それなら聞くまい。

「まあ、あの様子ならきつと幸せになるだろうし。心配いらねえ」

「だな」

ちらちらとこちらを伺う様子に気が付いてはいるのだが、話し出すのを待ってみる。

「……あのさ、大丈夫か？」

昨日、龍兄から兎の様子が変だったと聞いて何かあったんだろうと思う。

龍兄の結婚が原因かとも思ったがどうやらそれではなさそうだ。ちよつと安心するとともに浮かぶものがあるのだから聞きにくい。違ったら違ったで変なことになるだろうし。

心配そうな顔に、言うべきか言わないべきか迷う。

話をしても昨日が初対面の虎に志保のことが分かるとは思えない。一緒に空間に居て、虎が何かしたとは思えなかった。

だけど、どこで雰囲気が変わったかさえ気付かなかったのだから、私にはいくら時間をかけて分かりそうにない。

決心して口を開く。

「虎はさ、志保のことどう思う？」

予想通りで、やっぱりかと思う。

「兎の友達だから悪い奴じゃないだろうと思うけど……」
言っているものか少し迷う。

「けど？」

「俺のことは嫌いなんじゃないか？」

「……なんでだろ」

垂れた動物耳が見えたのは俺のせいじゃないと思う。

「こんにちは」

「……こんばんわ」

本当に嫌われてるな、と再認識しながらも笑顔で返す。

これも兎の為だ、やるしかない。

あんまりの凹みように見ていられなくて待ち伏せしてみた。
なんか、自分の行動力に驚きだが。

兎から聞いた情報を組み合わせて見た所、甲崎が降りる駅に彼女も降りるらしい。

「ちょっとお時間頂けますか、志保さん」

かなり嫌そうな顔をされたが、引き下がる様子を見せはしない。見つめあうとも睨みあうとも言えない数秒間、眼を逸らしたのは向こうだった。

「兎の様子がおかしいんだけど、知ってるよな？」

穏やかに始めるつもりだったののだが、兎の凹みようを思い出すと苛立ちが隠せない。

「なんで、アタシに聞くのかしら？」

シラを切りたいらしい。

「時期を見てだな。この前の様子で、俺が嫌いなのは十分に感じ取れたし？アイツには心当たりないみたいだし？」

シラを切るのなら切ろうとする理由がある。

それが分かれば、何とかすればいい。

「俺が嫌いなら、兎とアンタがいる時は邪魔しないし。アイツを困らせるの、やめてくれないか」

虎（後書き）

タイトルとしては動物の虎、のつもりで。

何という行動力でしょうか……、虎の思いにちよつと重たいものを
感じた方、見捨てないでくださいね！！

虎は（自分が関わっているからというのもあるので）兎の為ならこ
れくらいやります。

両親が突拍子ないので、多少のことはやれると思う……我ながら恐
ろしい。

恋路

見覚えのある顔が話しかけてきて、待ち伏せされたのだと気が付いた。

駅から移動する途中はちょっと睨んだだけで待ち伏せなどする心の狭いガキだと笑っていたのに。

「アイツを困らせるのはやめてくれないか」

ときた。

兎が私の様子を気にしていたのは分かっていた。

この子にたどり着いたのも知っていた。

まさか、その本人に会うとは思っていなかったけど。

「それ、兎に言われた訳？」

答えなんて分かっているけど。

「いや。俺の自己満足」

あの子がこんなこと知ったら頭抱えるでしょうね。

「それで、今までずっと待ってたわけ？」

大した忍耐力だね。

「まあな」

なんか、横柄な態度は真逆なのに。

そっくりなのは何だろう。

夏とはいえ、9時も過ぎれば半袖じゃ冷えるでしょうに。

私が馬鹿みたいじゃない。

つらつら考えながらも、

「別に、兎を困らすつもりはなかったんだけど」

ただ、アイツの壁が邪魔だと思っただけ。

「だろうな」

「理由、聞かないの？」

「別に」

そう言って、帰って行った。

「あー、何か負けた気分」

電車に乗る前の、一言。

『明日は普通にしてやって』

これじゃあ、どっちが年上か、分かんないね。

「人の恋路を邪魔する奴は犬に食われてって奴なのかなあ」

喧嘩売った相手は虎、だったけど。

トボトボと暗い帰り道を歩く。

多少の差はあれど、同じような環境の中で同族嫌悪。

なのに、片やもっと近づこうと手を伸ばして。片や今以上に離れることが怖くて、諦めて。

羨ましい気持ち混じってるんだろうな、と思う。

「仕方ないじゃない」

あの馬鹿は一途に想っているんだもの。

「何が仕方ないんだ？」

掛けられた声に顔を上げる。

「……肇、どっか行くの？」

ジャージってことはコンビニでも行くんだろう。

「そのサンダルは無いと思うけど」

はつきり言ってダサイ。

そんなところ見たら、大概の女は引くんだよ？

「誰のせいだと思ってんだ、馬鹿」

額を小突かれて、イラッとしたアタシは文句の一つでも口を開く。

「いつもならとっくに帰ってる筈の時刻なのに帰って来てないお前を探しに来たんだよ」

「アタシにもアタシの都合ってものがあるのよ」

ちらりと横目に見るとクシャクシャと頭を掻いていた。

きつとも通り、アンタは言うのよ。

「年下の癖に偉そうに言うな。最近は物騒なんだからな」

アンタは知らないでしょう？

兄妹のように育っただけで、アタシは肇の妹じゃないの。

妹分として見られていると分かっている、迎えに来てくれる、

心配してくれてるだけで胸が高鳴るアタシの気持ち——。

恋路（後書き）

志保は肇と幼馴染でした。

所々匂わせてはいたんですけど。お気づきの方もいらしたかもしれ
ませんね……。

欲しい言葉

「やば」

メールと電話の着信履歴は全て今日の21時から連なっている。
母親と父親が3件ずつ。

現在の時間は10時45分。

兎から聞いて、帰りが遅いのは聞いていたのだがまさかこんな時間になると言うのは予想外だった。

「これはこつてり絞られるな」

理由を話せないだけに。

まあ、いいかと家路に向かって足を進める。

帰りつけば11時、メールでも送っとくかと画面を引き出す。

どうやって怒りを減らせるか計算しながら言葉を探す。

「あれ、羽柴君？」

通り過ぎたばかりの横道から聞こえた声に振り返る。

どうやら知り合いらしい。

「佐々木？」

同じクラスの女子だ。

肩まで伸ばされた黒髪、小柄さが誰かさんと被る。

学生服のままな所から見て塾か何かだろう。

「私は塾の帰りなの。羽柴君は？」

「まあ、用事があったから」

聞かれて、はいそうですかと答えるような話ではない。

「そっか」

何とも切り上げづらい返事で、頬を掻く。

気を付けて帰れよ、と言おうとして口を閉じる。

こんな物騒な時代に一人？

「一人で帰んの？」

しまった、と思った時には口に出していた。

「えと、今日はたまたまで」

「ごめんね、送って貰っちゃって……」

「このくらいなら、別に」

来た道を逆戻りしながら内心と逆の表情を作る。

「実は、心細くって、すごく嬉しかった」

ここらは駅から外れて街灯も少ないから、と言っていたことを思い出す。

あのまま帰しても、何か俺が人でなしだから、と無理やり納得させる。

「兎？」

駅前に座り込んだ見覚えのある姿。

顔を上げたかと思えば、疲れた表情で。

「やっと、戻ってきた」と聞こえた。

いつから、待ってたんだろうか。

携帯の時計は0時5分前。

「帰ろうか、虎」

立ち上がる様子の無い兎に手を差し出せば、まるでその手が見えないかのように立ち上がる。

隣を歩いているのに、会話は無い。

視線に気が付いている筈なのに一度もこちらを向こうとしない。

「怒って「ないよ」」

気まずい空気の中、開いた口は閉じざるを得ない。

「電話も取れない用事があったんでしょう？」

悪いことしてないならいいわ、と視線は変えずに淡々と続けた。

「いいんじゃない？ 虎も、もう子供じゃないでしょう？」

欲しかった言葉の筈なのに、その響きに夜風の寒さに背が震えた。

おやすみ

駅前で座り込む私を横目にまばらな人混みは動き続ける。
パーカーで防寒対策はばっちりな筈なのに震えは止まらない。
駅員の家出少女扱いに笑いながら心は大きく動揺する。

「あの子も大きくなったってことなのかしらね」

22時を過ぎても帰ってこない虎におばさんはそこまで心配の色を見せない。

「どこに居るの」
今、誰というの。

街中で見かけた後姿に向かって人混みを掻き分けながら進む。
たった一瞬、見えた。

「そっか、……そういうこと」
同じ年頃の女の子の嬉しそうな横顔が隣を見上げるのを見てしまった。

人混みは視界から消え去って、見えているのは二人だけ。
言葉では理解していたつもりだ。

ずっと、一緒に居るなんて無理だと知っていた。
幼い約束だと、笑っていたではないか。

「あの約束を信じていたかったのは、私だったの」

聞き間違えることなど無い、その声が私を呼ぶ声で意識が浮上する。

ジープンに着いた染みを見せないように少しだけ顔を上げる。

「帰ろうか、虎」

そう言いながら、置き去りにされた自分を誤魔化す。

差し出された手を無いものとして扱うのもそう。

思った以上に子供だった自分に呆れているんだ。

その手を取ったら、言ってしまう。

「怒ってないよ」

「虎も、もう、子供じゃないでしょう？」

守らなければならなかった、小さなあの子はもういない。

「もう遅いから」

何もかも、気付くのが遅かった。

「おやすみ」

それなら、もう一度眠らせてしまおう。

口約束も二人を見た時の痛みと共に。

おやすみ（後書き）

勘違い発生です。

久しぶり

「何か、あったでしょ」

「何も」

お得意のポーカーフェイスに少したじろいだようだ。

「アタシには言いたくないこと？」

何かあったのは決定事項らしい。

全く、その洞察力はどうにかならないだろうか。

「誰にも言いたくないことよ」

そう、誰にも。

渦中の虎には当然のこと、それに繋がる両親は絶対駄目。

虎が気に入らない志保も当然論外である。

「それ、虎くん絡みね？」

図星でしょ、と言って笑う彼女の中に数日前までの不機嫌さは無かった。

「……アンタこそ何かあったんじゃない？」

「思うところあって意地を張るのはやめようって思っただけよ」

「ふーん？ それありえないと思うんだけど？ 見間違いじゃなくって？」

「アタシが虎を見間違える方がありえないわ」

その自信はどこから来るの、という言葉に確かに、とは思う。

人混みの中だったし、勘違いだったのだろうか？

「その様子じゃ妄想の彼女に遠慮して虎君のこと避けてんじゃないの？」

ソレも凶星。一週間、避け続けている。

「そのままじゃ、嫌なんでしょ？」

笑う友人は以前言っていたように背中を押してくれるらしい。

「兎ちゃん！ちょうど良いところに来てくれたわー」

チャイムを押そうとしたところで虎の母、千鳥さんが玄関から出て来たのだ。

「お仕事、ですか？」

仕事専用の大きな鞆が目に入る。

「そうなのよー、急なものだからどうしようかと思ってたんだけど」

「季節の変わり目だからなあ……」

聞いたところ熱を出して寝込んでいるらしい。

勝手知ったる人の家、階段をなるべく音を立てずに上っていく。小さくノックすると、ガチャリと鍵の外れる音がする。

「子供じゃねえんだから、ほっというて仕事行けて……兎？」

「千鳥さんなら、仕事に言ったわよ」

額に張り付いた髪の毛を避けて手をあてる。

「言ってた通り」

結構高めだ。

「さっさとベッドに横になって寝なさい」

数日間挨拶程度しか交わさなかった彼女に寝ぼけているのかと思ったが、どうやら違うらしい。

替えられたばかりのタオルの冷たさが現実であると教えてくれる。上ったり下りたりを繰り返す足音に耳をすませた。

「入るわ……寝てなさいって言ったのに」

ドアを内側に引いたら、頭一つ分下に驚いた顔。

「両手ふさがってるだろうと思って」

「調子の良いこと言っていないでベッドに戻る」

両手を塞いだ土鍋に気分が上昇する。

「久しぶりだな」

まともに目を見て話すのも、家に上がるのも、料理を口にするのも。

「そうかな？」

側に

「虎も、大きくなったもんね」

何をするにも付いてきて、そんな虎が可愛いばかりに世話を焼きまくっていた私。

今じゃ、世話を焼くことなど無いに等しい。

「その言葉おばさん臭い」

少し、頬に力を入れる。

雑炊から目を離さずに居てくれたのは幸いなことだ、細かな所に目の届く彼でも分かるまい。

「そうだね」

私は虎より先を走る。

ずっと可愛い弟のままできてくれたら、ずっと世話焼きなお姉さんでいられたら。

私は彼より早くおばさんになる。

少しばかり寂しい気がしていた。

「お揃いだな」

少し充血した、それでも澄んだ瞳がこちらへと動く。

「おじん臭いってよく言われる」

へらっと笑う、その顔に釣られて自分の顔も少し緩んだ。

外では大人びていると評価される彼が、どれくらい頑張ったのか、私が一番知っているようで、一番知らないのだろう。

隠れて無茶をする、それが虎だから。

「お揃いだね」

繰り返す言葉が心に溶けると少し心が落ち着いたように思う。

———それなら、そんな無理をしている俺も俺だって見てくれよ

今も、そう思っている？

私が気にするであろうことを気にして、溝を埋めようなんて努力しようなんて気持ちがある？

葉を取ってくるという彼女の後姿を見送り、少しばかり冷めた雑炊を啜る。

それにしても、と溜息を吐く。

仮にも弟分で、本調子で無いにしてもだ。

家族のいない家にのこのこと上がってくる兎に不安を覚える。

状況によっては他の奴にも同様に接するのではないかと。

正直、体がだるいし、説教もましてや何かしようとも思えないのだが。

それでも追い出さなかったのは、追い出す元氣も無かったのもあるが、それ以上に側に居て欲しいと思ったからだ。

「これって、歯牙にもかけられてないってことだよな」

例えそうだとしても、側に居て欲しい。

兎を寄越した母親に何かを感じなくもないが、考えるのも面倒くさい。

空になった土鍋をデスクに置き、横になる。

瞼が重くなるのに時間はかからなかった。

「寝てるし」

静かにドアを閉め、デスクに向いたばかりの林檎を置く。

つい、眼の端にとらえた紅がいけなかった。

葉を嫌がる虎に林檎で誤魔化していた、あの頃を思い出してしまったばかりに時間がかかってしまったのだ。

「最近思い出してばかりだな」

取り残される前のことをよく思い出してみる。

髪を掻き分けて額にタオルを乗せる所で手を止めた。

「あんなに近くにいたのに」

どうして遠退いてしまったのか。

チャンスはいくらでもあったのに、どうして手を伸ばせなかったのか。

考えても仕方がないのだが、ちらつく少女が私の眼を曇らせてしまふ。

冗談だと笑っていた口約束に縋る程には揺れている。

目を閉じて、開いてを繰り返し、ゆっくりとタオルを乗せた。

今日だけは私に譲ってね。

此処に居るべきは私じゃないけれど。

側に（後書き）

間が随分と空いてしまいましたが……。

推測

「……兎？」

呟いた名前とひんやりとした感触が意識を覚醒させる。

「うーちゃんじゃなくて残念でした」

舌打ちするのを寸前で止めて、起き上がる。

「帰って来たのか」

スーツ姿と言うことは帰宅直後。

目に優しくない口紅が引かれたそれは端を吊り上げて、綺麗な孤を作り上げる。

「後数秒早く起きたら、此処に居たのは愛しのうーちゃんだっただのにねえ？」

にやにやと笑うその目はからかいたくて堪らないと雄弁に語る。

こうなっては下手に口を開くのは命取りだ。

貝になるのが無難だろう。

「で、何をやらかしたの？」

ここ数日息子の様子が変なのは気付いていた。

てつきり、日付を超えて帰ってきたということで兎ちゃんに絞られたのだろうと思っていたのだけど。

どうやら違ったようだ。

勘ではあるが彼女絡みであるのは間違いない。

この子が動揺するのなんてソレくらいなもの。

言い換えれば、からかって遊べるのもソレしかない。

男の子の初恋は母親だと言われるが、ウチは規格外らしく、昔からそんな話が息子から出たことは無い。

かといって面白くないかと言えばそうでもなかったりする。
生まれた時から幼馴染に一筋、なんてドラマみたいでロマンチックではないか。

撮り溜めた二人の記録を見るのが老後の楽しみだったりするので、息子をそれなりに応援している。

最近の行動から何か変化を嗅ぎとってはいたものの、あの日以来不穏な空気が漂う。

気を利かせて、二人を引き合わせたというのにこの状況。

「何で俺のせいな訳」

口を噤んでいた癖に、触れられたら黙ってはられない。
青春ねえ。

「あの日、どこ行ってたの？」

「関係無い」

母さんには関係無い。

が、兎の様子がおかしくなったのはあの日を境にしてだ。

正直、お手上げ状態でもある。

「夜遊びじゃないわよね」

最近、兎ちゃんと帰って来てたじゃない？

その言葉に、悪寒が走る。

どっから見てんだよ！！

「アンタが兎ちゃんを蹴ってまでそんなことする筈なのは母さんが一番知っていることだもの」

理解じゃなく、知っていると云いきる所がさらに恐ろしい。

「出掛けたのは22時で帰って来たのは0時過ぎ、2時間もどこに居たのかしら。よく、合流できたと思わない？」

確かに、2時間と言う空白はおかしい。

合流できたのも偶然と決めつけるには引っかけがある。

兎は駅前に座り込んでいた。

その場で待つという行為には確信が伴うものだろう。

つまり、兎は俺があのだを通ると確信していたことになる。

しかもいつも下車して使う西口では無く通り抜けができる南口にいたことから電車を使っていないことを知っていたことになる。

辿り着く答えはただ一つ。

「……見ていた、のか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2889w/>

rabbit & tiger

2011年11月3日01時08分発行